

# 『第6回世界のウチナーンチュ大会』 大会調査報告書

## 1. 研究の概要・目的

2017年10月26～30日、「第6回世界のウチナーンチュ大会」が開催された。

今回の大会では、①世界のウチナーンチュの交流を通してウチナーンチュネットワークを発展させ次世代へ継承する、②沖縄独自のソフトパワーへの理解を深め、国内外へ発信する、③万国津梁の精神を次世代へ継承し、海外への雄飛を促進する、という基本方針のもと、県・市町村・各種団体が中心となり、数多くのイベントやプログラムが催された。海外からの参加者は7000名を超え、大会の延べ来場者も約43万人と過去最多の人々（ウチナーンチュ）が今大会に参加した。

前夜祭のパレードに始まり、開会式、歓迎会、イベント…そして閉会式。「おかえりなさい」、「ただいま」の言葉とともに、各地で交流の花が咲き、地域や世代を超えたウチナーンチュの架け橋が築かれていった。

我々の研究チームでは、この「第6回世界のウチナーンチュ大会」におけるウチナーンチュの人々の社会的・心理的側面を明らかにすることを目的に、大会参加者を対象とする調査を実施した。その中でも本報告では、『第6回世界のウチナーンチュ大会』における参加者の実態と、大会の評価と効果を検証することを目的に、以下の3点について集計・分析を行った<sup>1</sup>。

- ① 回答者に関する基礎的情報として、属性の分析を行い、参加者の実態を明らかにする。【どのような人が大会に参加したか？】
- ② 大会に対する参加者の満足度や不満点などについて検討し、参加者の視点から大会への評価を行う。【大会はどうだったか？】
- ③ 大会目標・目的（ウチナーンチュアイデンティティの継承、ウチナーンチュネットワークの構築）に関する分析を行い、大会それ自体の効果を検証する。【大会は「ウチナーンチュ」のためにどのように役立ったのか？】

## 研究組織<sup>2</sup>

### ○研究代表者

加藤潤三（琉球大学法文学部）

前村奈央佳（神戸市外国語大学国際関係学科）

### ○研究分担者

金城宏幸（琉球大学法文学部）

野入直美（琉球大学法文学部）

酒井 清（琉球大学法文学部）

山里絹子（琉球大学法文学部）

グスターボ・メイレス（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科国際関係論専攻後期課程）

### ○調査スタッフ

石原綾華・山下千春・琉球大学法文学部心理学コース学生 24名・神戸市外国語大学学生 19名

<sup>1</sup> 本報告書は、大会実行委員会が発行した「報告書」の一部を、各国県人会および県内関係機関用に加筆修正したものである。

<sup>2</sup> 本研究は文部科学省科学研究費補助金の助成を受けて実施した（基盤研究（C）、課題番号：15K04031、研究代表者：加藤潤三、および若手研究（B）、課題番号：16K17296、研究代表者：前村奈央佳）

## 2. 調査の方法

### ・ 調査協力者（回答者）

大会参加者 1119 名から回答を得た。ただし回答に不備のあったもの、および回答の妥当性の観点から 15 歳未満の参加者の回答を除外（26 票）し、最終的な有効回答数は 1093 名となった。

### ・ 調査方法

質問紙による調査を実施した。調査は大会 2 日目から最終日の 3 日間実施した。調査票は日本語・英語・スペイン語・ポルトガル語の 4 言語であり、調査用紙ないしタブレットで実施した。調査票の配布・回収は、大会会場に設置したブースおよびその周辺（沖縄県奥武山公園内）にて調査スタッフが大会参加者に声掛けをし、協力の意思を示した参加者に調査を依頼した。調査終了後、謝礼としてお茶を渡した。

### ・ 本報告書で使用した調査項目

【属性に関する項目】：参加者区分、沖縄系・移民世代、居住地、：県人会の所属と活動頻度、性別・年齢

【大会に関する項目】：参加目的、大会満足度

【大会の効果に関する項目】：アイデンティティ（ウチナンチュ・現地）、ウチナンチュネットワーク

## 3. 調査の結果

### ①回答者の基本属性の分析

#### 1) 回答者の参加区分（海外・県外・県内）

回答者が、海外・県外・県内のいずれから参加したかを区分したのが表 1 である。なお本調査では、大会参加者を対象としたため、「沖縄に観光に来ていて、たまたま大会に来た」という観光客は調査の除外対象とした。

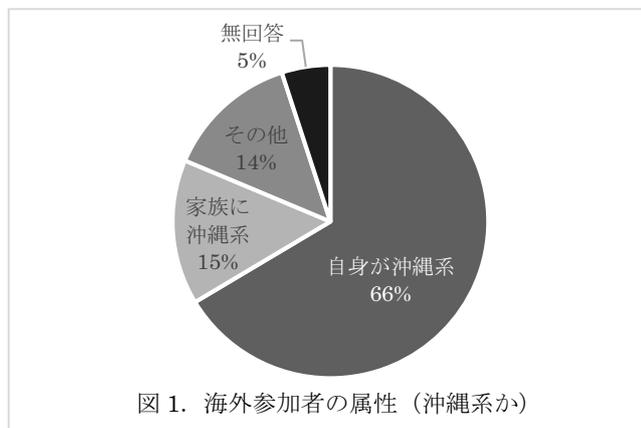
回答者のうち、海外参加者は 381 名であり、全回答者の 34.9%であった。県外参加者は 35 名（3.2%）とあまり回答が得られなかった。なお県外参加者のうち、もともと沖縄出身の人は 11 名であった。県内参加者は 677 名と最も多く、全体の 61.9%を占めた。なお各参加者区分ごとの性別比と平均年齢についても表 1 に示す。特徴的な点としては、海外参加者の平均年齢が 52.7 歳と、県外および県内参加者よりも高かった。そこで海外参加者の詳細な年齢構成を検討すると、60 代および 70 代以上が多く、10 代は 3 名と極端に少なかった。

表 1. 回答者の参加区分

	度数	%	性別						平均年齢
			男性		女性		不明		
海外参加者	381	34.9	146	38.3%	199	52.2%	36	9.4%	52.7歳
県外参加者	35	3.2	7	20.0%	24	68.6%	4	11.4%	46.6歳
県内参加者	677	61.9	206	30.4%	436	64.4%	35	5.2%	40.6歳

## 2) 海外参加者の属性（沖縄系・移民世代・居住国・県人会の所属）

海外参加者 381 名の詳細について分析を行う。海外参加者の内、自身が沖縄系であると回答した人は 253 名（66.4%）と最も多く、次いで家族に沖縄系の人がいるとした人は 57 名（15.0%）であった。その他が 52 名（13.6%）いたが、これには「沖縄系の友人に誘われて」や「沖縄系の活動に参加」といった人たちが含まれていた（図 1）。



次に海外参加者の移民世代について検討を行った。世代としては移民 1 世から 5 世までが参加していた。各世代の人数比は、1 世が 39 名（15.4%）、2 世が 66 名（26.1%）、3 世が 81 名（32.0%）、4 世が 25 名（6.6%）、5 世は 2 名（0.8%）であった。なお前回および前々回からの海外参加者の世代構成の推移を図 2 に示す。前回と同様、海外参加者の移民世代の中心は 3 世となっていた。ただし、前回からの相違点をあげると 1 世の割合が低下したのに対し、4 世が増加するなど、少しずつ海外からの参加者における世代のシフトも見てとることができる。

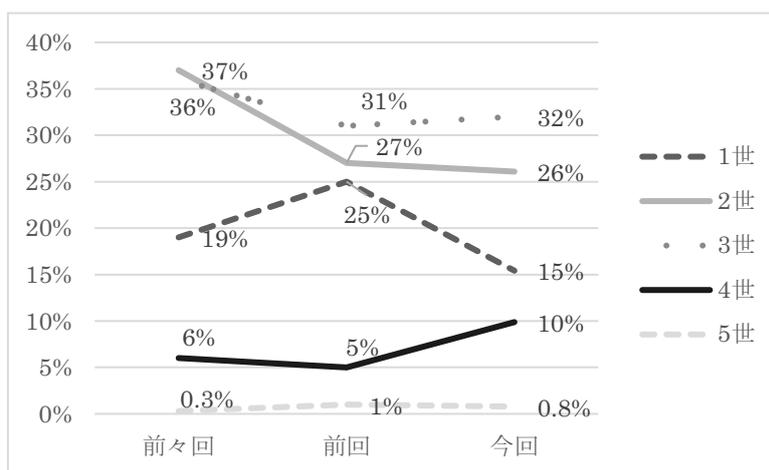


図 2. 海外参加者における移民世代の推移

海外参加者がどの国および地域から参加したかを明らかにするために、現在の居住地について分析を行った(表 2)。その結果、アメリカが 205 名と最も多く全体の半数近くを占めた。なおアメリカからの参加者のうちハワイからの参加者は 62 名であり、アメリカの参加者の約 30%を占めた。次いで多かったのはブラジルの 41 名（10.8%）であり、以下アルゼンチン、ペルーと南米の国が多かった。なお表 2 中

の右側の「大会参加者」は第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局調べの大会参加者数である。本調査と比較すると、ややブラジルの調査対象者数の割合が低いものの（4.6%の差）、おおむね実際の大会参加者の国・地域別の人数比と対応しているものと考えられる。なお海外参加者の回答であるにもかかわらず、現居住地として日本を挙げている人たちがいた。これらの人々はもともと海外移民で、現在は日本に住んでいるということである。

表2. 海外参加者の居住地

エリア	国・地域	調査対象者	大会参加者
北米	アメリカ (うちハワイ)	205 (62) (53.8%)	4247 (1861) (58.1%)
	カナダ	26 (6.8%)	197 (2.7%)
中南米	ブラジル	41 (10.8%)	1131 (15.4%)
	アルゼンチン	37 (9.7%)	525 (7.1%)
	ペルー	25 (6.6%)	620 (8.4%)
	ボリビア	5 (1.3%)	138 (1.9%)
	メキシコ	2 (0.5%)	23 (0.3%)
アジア	フィリピン	3 (0.8%)	76 (1.0%)
	タイ	2 (0.5%)	15 (0.2%)
	マレーシア	2 (0.5%)	4 (0.1%)
	韓国	2 (0.5%)	3 (0.04%)
	台湾	1 (0.3%)	16 (0.2%)
ヨーロッパ	イギリス	2 (0.5%)	32 (0.4%)
	スペイン	1 (0.3%)	1 (0.01%)
オセアニア	ニューカレドニア	1 (0.3%)	65 (0.9%)
	日本	17 (4.5%)	
	無回答	8 (2.1%)	
計		381	7353

海外参加者の人々がそれぞれ居住地で県人会に所属しているか尋ねた(図3)。その結果、227名(59.6%)の人が県人会に所属していた。県人会に所属している人々が、どれほど県人会活動に参加しているか尋ねたところ、「めったに参加していない」という人は2割程度、「ある程度参加している(82名、36.1%)」、「毎回参加している(80名、35.2%)」という人が7割以上であった。このことから、県人会に所属している人は比較的積極的に県人会に関わっていると考えられる。

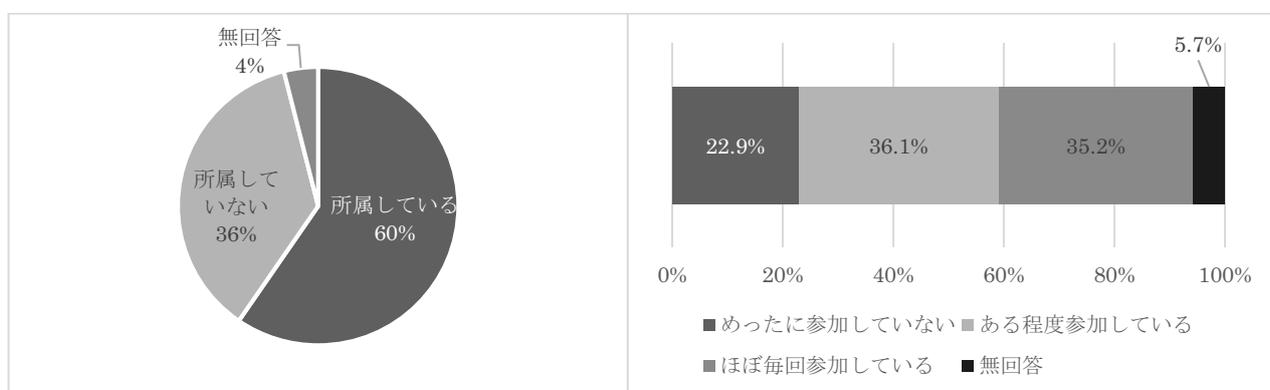


図3. 海外参加者の県人会所属と県人会活動

## ② 大会の評価に関する分析

### 1) 参加目的

回答者がどのような目的で大会に参加したのか、その参加目的を尋ねた。当然ながら、海外参加者と県内参加者とでは目的が異なるため、参加者区分ごとで結果を見ていく（表3）。

海外参加者では、「沖縄の伝統や文化を学ぶため」（15.7%）や、「親戚に会うため」（14.5%）、「自分のルーツを確認するため」（11.4%）などが多かった。県外参加者では、同様に「沖縄の伝統や文化を学ぶため」（13.6%）が多く、また「イベントに参加するため」（18.5%）というのも多かった。県内参加者では、「イベントに参加するため」（18.3%）というのが最も多く、それ以外として「世界の様々な文化と触れ合うため」（14.0%）、「世界のウチナーンチュと交流するため」（12.3%）、「沖縄系移民、政界の県系人について知るため」（10.2%）なども多かった。大きく言って、海外参加者にとっては「沖縄」と触れ合うこと、県内参加者にとっては「世界」と触れ合うことが目的となっていたと考えられる。

表3.回答者の大会参加の目的

参加目的	全体		海外参加者		県外参加者		県内参加者	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
自分のルーツを確認するため	141	5.2%	112	11.4%	3	3.7%	26	1.6%
世界のウチナーンチュと交流するため	305	11.3%	97	9.8%	7	8.6%	201	12.3%
沖縄県民と交流するため	144	5.3%	89	9.0%	5	6.2%	50	3.1%
いろんな世代のウチナーンチュと交流するため	93	3.4%	20	2.0%	3	3.7%	70	4.3%
沖縄の文化や伝統を学ぶため	272	10.1%	155	15.7%	11	13.6%	106	6.5%
世界の様々な文化と触れ合うため	252	9.3%	20	2.0%	3	3.7%	229	14.0%
沖縄系移民、世界の県系人について知るため	230	8.5%	56	5.7%	7	8.6%	167	10.2%
親戚に会うため	174	6.4%	143	14.5%	2	2.5%	29	1.8%
友人・知人に会うため	154	5.7%	81	8.2%	5	6.2%	68	4.2%
県人会のメンバーとの交流を深めるため	30	1.1%	17	1.7%	1	1.2%	12	0.7%
周り(家族・親戚・友人・県人会など)から誘われて	165	6.1%	64	6.5%	6	7.4%	95	5.8%
誰かの付き添いで	84	3.1%	31	3.1%	3	3.7%	50	3.1%
イベントに参加(出演・鑑賞を含む)するため	381	14.1%	66	6.7%	15	18.5%	299	18.3%
仕事や勉強のため	142	5.3%	11	1.1%	5	6.2%	126	7.7%
その他	63	2.3%	20	2.0%	2	2.5%	41	2.5%
特に目的はない(通りすがりなど)	71	2.6%	5	0.5%	3	3.7%	63	3.9%
計	2701		987		81		1632	

### 2) 大会満足度

第6回世界のウチナーンチュ大会に対して、参加者の87%が満足（「非常に満足（553名、50.6%）」と「やや満足（399名、36.5%）」の合計）していた。なお参加者区分別で示すと、海外参加者では「非常に満足」の割合が79.3%と極めて高かった。一方、県内参加者では、全体としての満足度は高いものの、「やや満足している」（51.0%）が多かった。この点に関しては、統計的に差があることが確認されている（ $\chi^2(8) = 209.507, p < .01$ ）<sup>3</sup>。一連の結果より、本大会への参加者の満足度は高く、それは特に海外参加者で顕著であることが示された。

<sup>3</sup> 度数に相違があるかを見るために、カイ2乗検定という統計的手法で分析した。

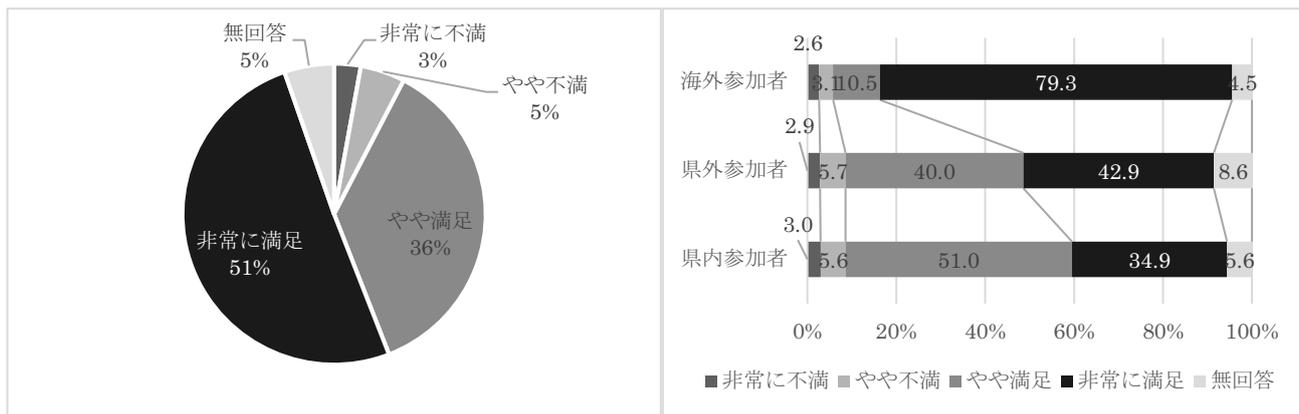


図4.大会満足度

### ③ 大会目標・目的に関する分析

これまで世界のウチナーンチュ大会では、その基本方針（大会目標）として、世界に雄飛する沖縄系の人々の人的ネットワーク（ウチナーンチュネットワーク）を構築することや、次世代への沖縄アイデンティティの継承が掲げられてきた。ここでは、これら大会目標に関する分析を行い、本大会が「ウチナーンチュ」の人々、社会、コミュニティに果たす役割や効果について検証する。

#### 1) ウチナーンチュアイデンティティの分析

「あなたはご自身を「ウチナーンチュ」だと思いますか」と尋ねたところ、79%の人々が自身のことをウチナーンチュだと思っている（「非常にそう思う」と「ややそう思う」の合計）ことが示された。また点数を1点（全くそう思わない）～4点（非常にそう思う）で計算したところ、平均点は3.43（標準偏差 $\sigma=0.90$ ）であり、大会参加者のウチナーンチュアイデンティティが極めて高いことが示された（図5）。

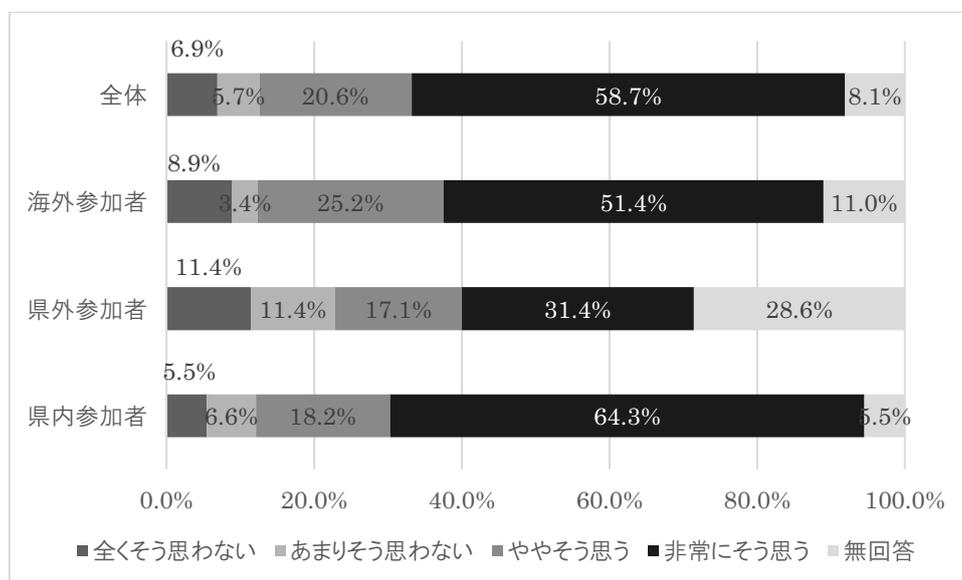


図5.ウチナーンチュアイデンティティ

次に参加者区分別にウチナーンチュアイデンティティを見ると<sup>5</sup>、「そう思わない」の割合は海外参加者の方で多く、「非常にそう思う」の割合は県内参加者で多かった（ $\chi^2(3)=21.08, p<.01$ ）。また平均値でも

<sup>4</sup> 得点のばらつきを示す指標である。値が大きいほど、回答者の点数のばらつきが大きいことを示す。

<sup>5</sup> 県外参加者でやや低い傾向にあった。ただし県外参加者の数が少ないこと、またもともと沖縄出身の人が11名しかいないことから、ここでは県外参加者の回答は除外し、海外参加者と県内参加者のみで比較を行った。

海外参加者が 3.34 であったのに対し、県内参加者は 3.49 と統計的にも有意に高かった ( $t(631.54)=-2.49$ ,  $p<.01$ )<sup>6</sup>。ただし、相対的に海外参加者の方が得点が低いといっても、4 点満点中の 3.34 点であり、海外参加者も高いウチナンチュアイデンティティを保持していると考えられる。

そこで次に、海外参加者のウチナンチュアイデンティティ（図中、沖縄 ID）が移民世代でどのように異なるか、またあわせて自身の居住地（出生地）である現地へのアイデンティティ（図中、現地 ID）との比較も通じ、海外参加者のアイデンティティの特徴について検討を行った。その結果<sup>7</sup>、移民 2 世以降では、ウチナンチュアイデンティティと現地へのアイデンティティに差が見られなかったが、1 世では、現地へのアイデンティティよりもウチナンチュアイデンティティの方が有意に高かった。この結果より、沖縄で生まれ、自身が海外へ移住した 1 世の人々では、相対的にウチナンチュアイデンティティの方が高いのに対し、移民先の国々に生まれた 2 世以降では、現地へのアイデンティティとウチナンチュアイデンティティが同程度に高かった。このことよりウチナンチュアイデンティティは世代を超えて継承されているとともに、2 世以降では、現地とウチナンチュ、2 つのアイデンティティが共存していると考えられる。

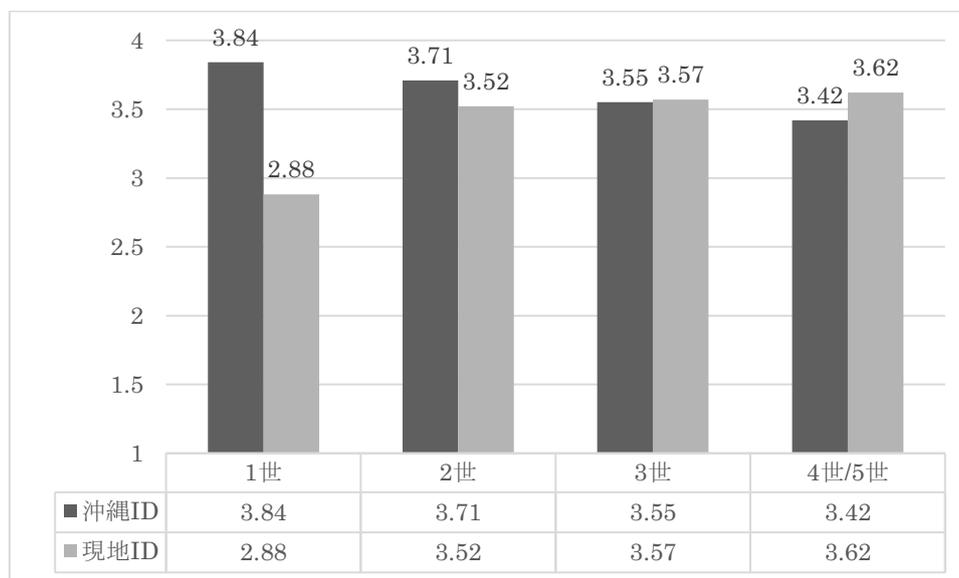


図 6. 海外参加者における現地 ID とウチナンチュ ID の比較

<sup>6</sup> 2 群間の平均値の差を検定するための統計手法である  $t$  検定を使用した。

<sup>7</sup> 統計的に 3 群間以上の平均値の比較を行う分散分析という統計手法を用いた。専門的な書き方になるが、分析の結果、沖縄 ID と現地 ID の間に相違が認められ ( $F(1,186) = 11.13$ ,  $p < .001$ )、また ID × 移民世代の交互作用が有意であった ( $F(3,186) = 10.79$ ,  $p < .001$ )。上の表記は主に交互作用に対する下位検定の結果である。

## 2) ウチナンチュネットワークの分析—大会を通じて生まれた新たなネットワークについて

今大会を通じて、新たなウチナンチュ同士のネットワークが生まれたか、その人数を尋ねた。回答の集計に当たっては、全体の度数の分布の割合から、全くネットワークが生まれなかった「0人」、「1～10人」、「11～30人」、「31～50人」、「50人以上」の5段階に分類しなおした<sup>8</sup>。

参加者区分によって尋ねている項目（ウチナンチュネットワークの種類）が異なるため一括的に評価できないものの、全体的な傾向として、県内参加者では、「0人」の割合が多かった。また構築されたとしても、「1～10人」と少人数がほとんどであった。これらの結果から、県内参加者では、大会を通じてほとんど新たなウチナンチュネットワークが構築されていないことが示された。一方、海外参加者においては、「0人」という人も30%前後いるが、逆の言い方をすれば、70%近くは新たなウチナンチュネットワークを築いていた。また新たなウチナンチュネットワークの創出は全般的に生じており、海外参加者においては、それぞれの国・地域と沖縄をつなぐ母県とのネットワーク、国同士をつなぐ越境的なネットワーク、そして国内や地域内をつなぐローカルなネットワークが構築されたと考えられる。

以上より、大会目標・目的であるウチナンチュネットワークの構築ということを考えると、特に県内の人がネットワークを作る機会としては十分とは言えず、改善の余地が大きいと考えられる。

表 4. 大会を通じて生まれた新たなウチナンチュネットワーク

参加者区分	新たに生まれたウチナンチュネットワーク	0人	1～10人	11～30人	31～50人	50人以上	無回答
海外参加者	住んでいる地域(州・県)の人	40 18.3%	83 38.1%	56 25.7%	17 7.8%	22 10.1%	163 42.8%
	住んでいる国(他州・他県)の人	57 29.8%	76 39.8%	30 15.7%	13 6.8%	15 7.9%	190 49.9%
	沖縄県内の人	62 30.2%	90 43.9%	36 17.6%	5 2.4%	12 5.9%	176 46.2%
	日本国内の人	104 55.6%	66 35.3%	10 5.3%	1 0.5%	6 3.2%	194 50.9%
	他国の人	72 36.5%	83 42.1%	27 13.7%	7 3.6%	8 4.1%	184 48.3%
県内参加者	沖縄県内の人	290 75.3%	69 17.9%	14 3.6%	2 0.5%	10 2.6%	292 43.1%
	日本国内の人	314 83.3%	51 13.5%	8 2.1%	1 0.3%	3 0.8%	300 44.3%
	海外の人	314 79.1%	68 17.1%	9 2.3%	3 0.8%	3 0.8%	280 41.4%

## 4.まとめ

- ・多様な年代、多様な国からの参加があった。海外参加者については、移民世代の変容の傾向も見られる。
- ・参加目的は、参加者区分で異なっており、海外参加者は「沖縄」に触れること、県内参加者は「世界」に触れることが主な目的となっている。
- ・大会満足度は高い。その中でも特に海外参加者の満足度が極めて高い。
- ・大会参加者のウチナンチュアイデンティティは高い。
- ・海外参加者のうち、1世の人々では、相対的にウチナンチュアイデンティティの方が高いのに対し、2世以降では、現地へのアイデンティティとウチナンチュアイデンティティが同程度に高い。ウチナンチュアイデンティティは世代を超えて継承されているとともに、2世以降では、現地とウチナンチュ、2つのアイデンティティが共存していると考えられる。

<sup>8</sup> 全般的に無回答の割合が多く、これらを含めた%で集計すると大幅に回答が歪んでしまう。そこでここでは、無回答を除いた有効データによって分析を行った。また県外参加者の人数が少ないため、ここでも分析から除外した。

- ・大会を通じて新たに生まれたネットワークは、比較的海外参加者が多いものの、県内参加者ではほとんどネットワークの拡大は見られない。「ウチナーンチュネットワークの構築」に関する大会目標・目的については、十分に達成されているとは言えず、交流を促進させるようなプログラムの改善が必要である。

## 5.最後に

調査にご協力いただきました大会参加者の皆様に感謝申し上げます。本報告書は、大会調査の一部をまとめたものであり、今後さらに研究論文として内容を精緻に検討していく予定です。本報告書についてご意見等ございましたら、下記までご連絡ください。なお本調査結果は、まだ正式な公表前の段階のものでありますので、恐れ入りますが、2次利用についてはご遠慮ください。

琉球大学 加藤潤三 : [jkato@ll.u-ryukyu.ac.jp](mailto:jkato@ll.u-ryukyu.ac.jp)